

福島県立郡山萌世高等学校 定時制課程・通信制課程
多様性に対応した「個別支援教育」の取組
～エンカレッジプログラムの開発（2年目）をとおして～



「郡山萌世高校の個別支援教育について」

個別支援教育は、本県教育の重要な施策の一つであるとともに、本校の開校以来の基本方針「生徒一人一人を真に大切にする教育」と軌を一にするものです。この3年間、これまでの伝統を深化・進化・新化させるべく、個別支援教育コーディネーターをつなぎ役として多くの関係機関と連携しながら組織的に取組を進めてきました。

私たちが目指しているのは、困難を抱える生徒の「受け皿」に留まるのではなく、多様な生徒の「主体的な選択」として学んでもらえる学校です。それはどの生徒も卒業後の長い人生を幸せに歩んでほしい（Well-being）と考えているからです。

そのため、取組の柱として、①全ての生徒が安心して学ぶことができる教育環境の整備（学びのユニバーサルデザイン）、②コミュニケーション力や思いやり・共感性・協働性などの社会的資質・能力の育成、③NPOや地域若者サポートステーション等と協働し、卒業後も頼れる人や機関との関係づくりと段階的・系統的なキャリア教育の実施です。そして、取組全体に共通して私たちが大事にしているのは、生徒一人一人の自立支援です。

多様化・複雑化する援助ニーズに対して、普通科の定時制・通信制高校としてどのように丁寧に応えていくのか、挑戦は結構に就いたばかりですが、学びのセーフティネット、学ぼうとする人の「最後の砦」としての役割を果たすべく、本校ならではの個別支援教育にこれからも積極的に取り組んでいきます。

最後に、本校のスクール・ポリシーは生徒が考えてくれました。その中のアドミッション・ポリシーに示した、「自分を変えるきっかけを見つけていたい生徒」（定時制）「自由な時間を使って自分のやりたいことに挑戦したい生徒」（通信制）、本校で学んでみてはいかがでしょうか。お待ちしています。

「エンカレッジプログラム」とは

- 生徒一人一人の援助ニーズを的確に把握した丁寧な指導・支援及び計画的・系統的・段階的な進路指導（キャリア教育）を進める。
- 課題の未然防止や早期発見・対応を含めた「個別支援教育」を充実させる。
 - ・本校性にふさわしいエンカレッジプログラム（HEP）を開発し有効な支援につなげる。
 - ・学校も一定の福祉の役割を担う状況にあるため、本校教員の資質向上と関係機関からの支援や連携を強化する。
 - ・個別支援教育コーディネーターの役割を明確化し、校内支援体制を整備する。
- ①②をとおして、生徒一人一人の進路実現とWell-beingを実現する。

令和6年度
エンカレッジプログラム 実施一覧

【定期制課程：昼間主 2・3年次】

No	実施月	プログラム	内容等	備考
1	4月	進路講話（就職支援教員）	キャリア育成・発達について	2・3年次 講話
2	4月	進路指導（学年次担当等）	進路活動の説明（進路の手引き）を活用	2年次 講話
3	4月	アンガーマネジメント	怒りのコントロール方法について知る	2年次
4	4月	ペインティングビューワーク	ペイントについてイメージを行ない、クラスメートへの理解を深める	2年次
5	4月	感じ方って人それぞれ	「絵」「LINE」等の文面から自分がどう感じたかを第三者と共有する	3年次
6	4月	進路講話（進路指導主事）	「自分らしい人生」に向けて	2年次 講話
7	4月	進路対策学習会	進路実現に向け、一人一人が学習計画を立てるとともに、「学びか」を学ぶ。	2年次

【定期制課程：昼間主 1年次】

No	実施月	プログラム	内容等	備考
1	4月	グループエンカウンター	グループ協働による仲間づくり	体験活動
2	4月	座席表づくり	クラスメートの名前や好きな食べ物等を開き、座席表を作る	体験活動
3	4月	担任教師のヒューマンライブラー	担任の先生を聞き、自分が自己開示するための安心感を養う	講話
4	4月	アサーショントレーニング	相手に快い思いをさせずに自分の思いを伝える方法を学ぶ	体験活動
5	4月	ペインティングビューワーク	ペイントのイメージを行ない、スマートへの理解を深める	体験活動
6	4月	アンガーマネジメント	怒りのコントロール方法について知る	体験活動
7	4月	感じ方って人それぞれ	「絵」「LINE」等の文面から自分がどう感じたかを第三者と共有する	体験活動
8	4月	クラス目標づくり	学級目標をクラス全員で考え、教室内に掲示する	体験活動
9	5月～7月 9月～12月	萌世カフェ	生徒の居場所づくり	定期制 共通
10	9月	ハイバー-QLテスト	自己理解の一助	体験活動
11	11月	データDW	男女間で起る「暴力」への理解と対応	講話
12	12月	伝承館見学	3つのコースに分かれての自主研修	体験活動
13	12月	レジリエンストレーニング	心の回復方法を知り、実践する	体験活動
14	1月	ハイバー-QLテスト	自己理解の一助	体験活動

※ 個別支援の特徴が記載がないプログラムについては、ワークショップ形式での実施。（以下同じ）

※ 今年度は、生徒の実態を踏まえ、4月を新たに「仲間づくりとキャリア教育」月間として集中的にプログラムを設けたため、4月の実施が多くなっています。（以下同じ）

「個別支援教育活動への参画」

NPO法人こおりやま子ども若者ネットワーク
理事長 鈴木 綾

私たちNPO法人こおりやま子ども若者ネットワークは“子ども若者”に関する団体個人で構成するネットワーク組織です。各団体の実践やテーマは様々で、「子ども食堂」「フリースクール」「就労支援」「障害福祉サービス」「女性支援」「子どもの貧困」「ひきこもり」などが挙げられます。現在、30の団体個人が加盟し子ども若者が社会的に包摂される地域社会の実現を目指して活動しています。

そんな私たちが福島県立郡山萌世高校に関わらせて頂くようになってから4年目になります。学校図書館を活用した校内居場所から始まった取り組みも、現在は授業の協力や学校外資源との繋がり、図書館のみで行っていた校内居場所の取り組みも、飲食可能な教室で、おにぎりやみそ汁を提供する試行や、通信制課程の生徒向けに各地の支部活動時に設置する居場所など取り組みも行っています。今後、生徒の進路サポートについても貢献できることを模索したいと考えています。先生方と協議しながら必要だと思う実践を積み上げています。

そんな積み上げの背景には、校長先生を始めとする学校職員の方々との思いの共有があります。先生方からは、「生徒のためになることであれば立場を超えて挑戦しましょう。」「学校と地域が連携しなくてはならないのはもう当然のことです。」との言葉を頂いています。

近年、学校とNPO等の民間団体の協働の必要性は認知されてきています。一方、その具体は各地で試みはあるにせよまだに発展途上の段階ではないでしょうか？その試行錯誤の礎石は、校長先生が私たちに話してくれた言葉だと思います。「新しいことをやるために失敗はありません。」生徒の個別性に合わせた取り組みを今後とも新しく作っていきたいと考えています。

令和6年度 福島県学術教育振興財団助成事業

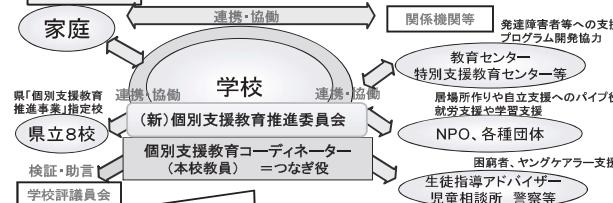
「個別支援教育」の充実に向けたエンカレッジプログラムの開発(2年目)

福島県立郡山萌世高等学校
定期制課程・通信制課程

現状と課題

- ①本校には自らの力だけでは解決できない課題を抱える生徒が多数在籍（例：不登校、発達障害、貧困、ヤクザ行為）
- ②により、集団生活に「困惑」を持つ生徒・長々・休眠生・転学・退学、進級できない生徒が一定数存在
- ③生徒一人一人の援助ニーズに応じた丁寧な指導・支援と、段階的・計画的な進路指導（キャリア教育）が必要
- ④①②に対応するため、学校にも適切な役割が求められている
- ⑤関係機関からの支援や連携強化、教員の資質向上が必要
- ⑥課題の未然防止や早期発見・対応を含め「個別支援教育」の校内支援体制の整備が必要

事業内容 萌世版エンカレッジプログラム（HEP）の研究・開発



R6萌世版エンカレッジプログラム（HEP）

- コミュニケーションスキルトレーニングの開発と活用（主に新入生対象）
 - 【体験活動】就労体験、伝承館研修、県立8校との協働（例：農業高校での実習）
 - 【ワークショップ】自己分析、グループエンカウンター、アンガーマネジメント、SOSの出し方【社会とつながる講座】
 - 【ソーシャルスキルトレーニング（SST）】の開発と活用【特別な援助ニーズのある生徒】
 - NPO「こおりやま子ども若者ネット」等と連携した支援【主に不登校生対象】
 - 校内「新規開拓フェア」の拡充検討 ○ オンライン居場所作り（Googleミーティングの活用）
 - 地域若者サポートステーション等と協働したキャリア教育【全ての生徒】

本校における「個別支援教育」とは

- 多様化・複雑化する援助ニーズに対し、教員の同僚性を柱として、家庭や関係機関等と連携・協働しながら、特別支援教育や生徒指導との連携を含む
- ・特別支援教育や生徒指導との連携を含む
- ・関係機関からの支援や連携強化、教員の資質向上が必要
- ・課題の未然防止や早期発見・対応を含め「個別支援教育」の校内支援体制の整備が必要

本事業のコンセプト

- 教育的配慮のもと、「かかわる」
- 合理的配慮のもと、「支える」
- 自立支援に向けて、「つなぐ」

3年間でこれを往復しながら、個別支援体制を整備し、深化させる。

4つの成果

- 生徒は自分らしく学校生活を送ることができる
 - ⇒ 基礎学力の定着と進路実現
- 生徒の社会的資質の向上が期待できる
 - （コミュニケーション力、レジリエンス、共感性、思いやり、自律、自己肯定感など）
 - ⇒ 学業後、持続可能な社会の創り手の一員として、Well-beingの実現
- 教員は、指導スキルとノウハウが習得できる
 - ⇒ 課題の早期対応と組織的支援が可能に
- 学校の理解と特色化も促進
 - ⇒ スクール・ポリシーにも反映・連動

萌世 定時制課程

○萌世カフェ&萌世カフェ+（プラス）○

定時制では、月に1回ずつ萌世カフェと萌世カフェ+（プラス）を実施し、生徒の居場所作りや教師ではない大人に悩みを相談できる場所作りを行っています。萌世カフェでは、カフェスタッフや反対同士でボードゲームやおしゃべりを楽しむ様子が見られています。

また、萌世カフェ+（プラス）では、美味しいおにぎりやあたたかいみそ汁、カレーライス等の軽食を提供しており、毎回100人を超える生徒たちが訪れています。お昼ごはんをしっかり食べることで、午後の学習にも集中して取り組めているようです。生徒たちからは、「毎日萌世カフェだったらしいのにな。」「萌世カフェのために学校に来ています。」という言葉を聞くことができました。



○「チーム郡山萌世」○

月に1回の個別支援教育推進委員会を中心に、教員間で日々生徒の情報共有を行い、担任や年次（学年）だけではなく学校全体で生徒の様子を見守っています。週に1回ずつSCやSSWも来校しているため、心や家庭の悩みを気軽に相談することができる環境も整っています。こおりやま子ども若者ネットワーク（以下、子わかネット）のスタッフとも情報共有をし、必要に応じて福祉や行政の支援に繋げています。

○新入生のための「仲間づくり」月間○

新入生にとって4月は新しい環境でスタートを切るために最も大切な時期です。令和6年度は4月の時間割を組み替え、「エンカレッジプログラム」（グループエンカウンター、座席表づくり、担任教師のヒューマンライブラリー、ペアインタビューワーク、感じ方の違いの学習、クラス目標づくり）を実施し、仲間づくりを行いました。共

感・共同→自己理解→自己開示→他者理解の段階を経て、学級や学年内で生活していくための安心感を獲得することができました。生徒たちに行なった事後アンケートでは、「グループエンカウンターが特に楽しかった。」「担任の先生がどのような人なのかを知る良い機会となった。」「安心して学校に通えそう。」などというコメントが多く見られました。



○よりよく生きていくために○

心の安定を図り、将来よりよく生きていくために自立活動の視点を取り入れた学習を行っています。令和5年7月は性や命について、令和6年4月には自分も相手も大切にした表現方法を学ぶアサーショントレーニング、怒りをコントロールするためのアンガーマネジメントについて専門家から講話ををしていただきました。また、令和6年11月と12月には、昼間主1年次や夜間主生徒を対象に、交際関係にある2人の間で振るわれる暴力のことを指すデートDV、落ち込んだ時に気持ちを回復させるレジリエンストレーニングについての講話もしていただきました。



○充実したキャリア教育○

生徒が希望する進路実現に向けて、充実したキャリア教育を行っています。例えば、令和6年度からは学校行事として昼間主2年次、夜間主3年次全員参加を原則とするインターンシップを実施しました。訪問先で体験した仕事はもちろんのこと、事前に行った電話でのやり取りや自宅から訪問先までの交通手段を調べる学習等を通して自己理解能力や課題対応能力を育み、将来自分にはどのような仕事が向いているのかを考えるきっかけになりました。また2年次からは、就職支援教員が生徒全員と面談を実施し、進路実現に向けて必要な助言と併せてスキルトレーニングを行っています。



萌世 通信制課程

○特別活動○

通信制に通う生徒の多くが抱える悩みがあります。それは、友だちがなかなかできないということです。子わかネットが実施したコミュニケーションワークはそのような悩みを抱える生徒たちに好評でした。令和5年度よりも令和6年度のほうが参加人数は増えていることはその裏づけになると思います。

※特別活動（子わかネットの授業協力）へ参加人数

	令和5年度	令和6年度
郡山方部（日曜日実施）	37名	48名
郡山方部（月曜日実施）	実施せず	17名
福島方部	10名	13名
白河方部	15名	26名
会津方部	9名	8名
いわき方部	19名	23名
原町方部	8名	13名



○萌世カフェ○

萌世カフェは令和5年度、郡山方部だけの活動でした。令和6年度は各方部で活動しました。それにも関わらず各方部で多くの生徒が活動に参加したのは、昨年度の特別活動で子わかネットの皆さんとコミュニケーションがとれていたことが大きな要因になっているのではないかと思います。多くの生徒が最初から安心して参加できたようです。

※萌世カフェへの参加人数（延べ人数）

	令和5年度（3回実施）	令和6年度（2回実施）
郡山方部	延べ63名の参加	延べ52名の参加

令和6年度

福島方部	延べ13名の参加
白河方部	延べ9名の参加
会津方部	延べ4名の参加
いわき方部	延べ46名の参加
原町方部	延べ15名の参加



〈まとめに代えて〉 個別支援教育コーディネーターよりひと言

定時制 昼間主 二平真実 教諭

初めは手探りであった個別支援教育も、少しずつ形ができ始めてきました。今後も寄り添ったきめ細かな支援を切れ目なく行い、生徒にとって学校が安心して学ぶことができる居場所になるように尽力していきます。

定時制 夜間主 今井康貴 教諭

4月に行なったエンカレッジプログラム（レクリエーション）を夜間主は全学年合同で行いました。そこで年次（学年）を超えての交流が生まれ、縦のつながりを意識できたことは、生徒たちにとって非常に良かったです。次年度についても計画を立てていきます。

通信制 上田正孝 教諭

特別活動も萌世カフェもそれぞれに有意義な活動でしたが、もう少し工夫を凝らすことによってさらに良いものにできるのではないかと考えています。例えば、特別活動の後に萌世カフェのような憩いの場を設け、スクーリングが終わった後も親睦を深める場所を提供することなどは通信制の生徒にとっては有意義な空間になると 생각できます。